

もっと知りたい ふるさと

門付けと巡礼の話

宮原 英夫

沖浦和光氏はその著者「旅芸人のいた風景」の中で「私是一九二七（昭和二）年の元日生れだが、その一週間前までは大正時代だった。したがって私たちが、いわゆる「昭和世代」のトップバッターということになる。（略）さてこの小論は、実際にこの目で見えた「旅芸人」の回想記から始まる。おそらく昭和前期に生まれた私たちが、彼らの姿を實現した最後の世代だろう」と述べています。

私は沖浦氏より一廻り下の世代ですが、昭和二十年代の前半には、各地を歩きながら門付けなどして生計を立てていた人々を見ることができました。こうした人々について六十一年も前のことなので記憶の定かでないところもありますが一、二、三記してみたいと思います。

私の住んでいる所は、上山田の羽場という地区です。そ

こには山伏塚と呼ばれている古墳があります。東側には小平甚右衛門の碑や僧慈順の筆塚の碑があり、上部は墓地で西側には山伏塚の名称の由来となった山伏西宝院の記念碑もあります。数十基の墓碑は上部の周辺にあり、中央部が小さな空地になっていたので子供たちの遊び場でした。

昭和二十五年の春先のある日、いつものように遊んでいると、山伏塚の北側の家の庭に中年の男の人が何か唱えながら入って来るのが見えました。五、六人の仲間と何だろうと行つて見ると、長さ三十センチ程の小さな俵に紐をつけたものを持ち「一つ転がしや千俵、二つ転がしや万俵」などと言いながら、家の中に俵を投げ込んで紐で引寄せていました。家の人が出て来てお捻りを渡すと、何ごとかを唱えた後に「おめでとうござい」と言つて去つて行きました。これは「俵転がし」と呼ばれる祝ぎごとをする門付けであつたようです。

昭和二十一年一月、祖父の葬儀の翌日に家族、親戚で寺参りに出かけようとしていた時、四ツ竹を鳴らしながら軒先に立つた男の人がありました。誰かが

「祭文が来たようだ」と言いました。父が「親父は浪花節が好きだったから供養に語つてもらうか」と言つてその人に頼みました。

私にはその内容は判りませんでした。大人たちは「壺坂だ」とか「お里・沢市だ」と言つていました。今にして思えば、一世を風靡した浪花亭綾太郎の「妻は夫をいたわりつ夫は妻にしたいつつ」で知られる「壺坂靈験記」であつたようです。語り終えた「祭文語り」に米やお捻りを渡して行きました。寺参りの後、墓地で線香を手向けようとしたところ、線香を持つて来るはずの人が、祭文に聞きほれて忘れてしまい、取りに帰るといいうおまけまでありました。

これは父のメモがあるので昭和二十三年六月十日の午後ということが判ります。

この日は休日でも家におりました。昼めしが終り食休みをしている時に、真白な鬚を伸ばし白衣を纏った小柄でやせた老人が、長い杖をついてやつて来ました。この人は徳島出身の廻国巡礼者—父のメモには阿波国那賀郡の人石原秀昌とある—で、智識寺へ向う途中迷い込んだというのでした。休んでいきな

さいと言ひ、昼食を出し、帰りには米やお捻りを渡してしました。

巡礼者は白紙を求め笈から矢立てを出して何かを書いて父に渡し、読経をしてから去つて行きました。紙には「よしの川そのみをかみを たづぬればむぐらのしずく 萩のした露」という和歌が記してあると父が読んでくれました。今見ると「随自示」という関防印、「州甫かく」の下に「石原」と「州甫」の落款が捺されています。

なお「よしの川云々」の和歌は、作者不明ですが古くより有名で、歌句に異同はありますが「信長公記」、「可笑記」、「醒醉笑」などに引用されています。「吉野川」は和歌山県の紀ノ川に注ぐものと徳島県を流れるものとが知られています。石原氏は徳島の人なので、自作のように利用したのかも知れません。

私の小学生の頃には、門付け芸人や巡礼以外にも、「箕直し」や「鑄掛け屋」などの人々も廻つて来たものです。

それも、昭和三十年代の高度経済成長期になると、その姿を見ることができなくなりました。今はただ、懐かしく思い出されるばかりです。